

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02921

研究課題名(和文) 留学生リソースの共有活用による多地点異文化交流を通じた地方大学外国語学習再起

研究課題名(英文) Revival Action for English Learning Environment Improvement through Cross-Cultural Activities with International Students in Regional Universities

研究代表者

小野 真嗣 (ONO, Masatsugu)

室蘭工業大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：10369902

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は地方特有の環境から都市部ほど充実していない異文化交流環境を改善し、少ないながらも自大学の外国人留学生を人的資源として有効活用し、隣接する大学間で人材共有を図ることで、地方版の異文化交流活動と外国語運用機会を創出・構築することを目的とした。教育実践の成果として、対面合宿による異文化交流活動を機関合同で行い、外国語運用機会が創出された。また参加学生に外国語学習意欲の向上が見られ、外国語使用の継続性についても効果が見られた。さらなる機会確保のため、非同期的な文字メッセージ、また同期的なビデオ会議によるコミュニケーションの体制の構築を通じ、地方大学における異文化交流活動が創出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、大都市圏ではなく地方において外国人人材がそもそも極めて少ない地域の環境を踏まえた上での、外国人との異文化交流機会の創出に焦点を当てた研究活動である。身近にすぐ異文化環境に触れられない地方都市においては、近郊の学校間での留学生人材の共有化や、対面合宿や情報機器を使った遠隔交流といった異文化活動の実践を、学校側が積極的に行うことで機会が担保される。地方の大学や高専で就学する学生達にも、都市部と同様の国際性涵養の機会を設けることができる一つの手段を示すことができた点で、学術的意義や社会的意義があったと考えている。

研究成果の概要(英文)：This research focused on improvement actions of English learning environment for regional college students, who would hardly be involved in cross-cultural exchange situations in regions away from the metropolitan area. The researchers conducted the following educational practices by sharing international students in each college as a global human resources; cross-cultural in-person training camps in English, asynchronous internet-communication like text messages, and synchronous online-communication like Zoom sessions. The participants were motivated in foreign language learning and continuously intended to learn the language by themselves. Through a series of efforts in this research, the researchers have found several patterns of cross-cultural activities in regional colleges.

研究分野：外国語教育

キーワード：留学生活用 地方大学間連携 国際交流 外国語運用 合宿研修 環境防災学習 オンライン交流 国内留学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

我が国における外国人留学生はコロナ前の状況においては年々増加しており、日本学生支援機構(JASSO)がまとめた2015年の本科学取組開始時点の外国人留学生在籍状況調査結果によると、2011年では163,697人であった人数が、2015年には200,000人を初めて突破し208,379人となった。しかしながら、その半数以上となる52.7%(114,778人)の留学生は関東で就学しており、著者の勤務する北海道では国内総数のわずか1.4%(2,974人)であった。さらにその北海道内の内訳では、およそ半数の52.7%(1,570人)が北海道大学へ通い、この数値は慶應義塾大学の1,418人、立命館大学の1,587人と、大規模私立大学が有する人数とほぼ同数であった。日本国内の留学生在籍数がそのように推移する一方、著者の所属先である室蘭工業大学の外国人留学生数は当時149人であり、国内総数のわずか0.07%であった。この数値から見ても、大都市圏・大規模の大学では、留学生との異文化交流は容易に図ることができ、その恩恵を享受できる一方で、地方大学単独では人数の上でも厳しく、地方で異文化交流を推進していくには非常に限られた環境の中で図っていくことになることが統計上の結果から判明した。

異文化交流がもたらす外国語学習への動機付け効果は各研究者でも多数報告されており、異文化接触が効果として学業のみならず生活面における積極性を促す要因となっている点が指摘されていた。本研究は、留学生との異文化接触がもたらす外国語学習や運用力向上の効果を期待する中で、限られた人数しか留学生を有していない地方大学が隣接校と連携しながら、教育資源としての留学生を広域活動圏として形成して彼らを共有・活用し、留学生との遭遇機会を高め、地方におけるインターラクティブな異文化交流活動の創出を第一の目的とした。そしてその交流実践を通じ、学生の外国語運用能力の向上を促すことを第二の目的とした。その広域活動圏の形成には、対面と遠隔の双方の手段を検討し、対面性確保には合宿交流を、そして遠隔による結びつきには情報技術を最大限に利用し、テレビ会議システムの活用を想定した。これにより、地方大学が異文化交流において不利な点を解消しつつ、学生が国際的視点を養う環境を整備できることになり、都市・地方を問わずに異文化・国際交流拠点が出来上がり、再起をかけた外国語運用力の向上が期待された。

2. 研究の目的

本研究は、都市部から離れた地方においても異文化理解・国際交流に積極的に取り組める疑似空間を提供しながら、理工系学生が有する外国語運用力の弱さを克服するため、環境改善を行うことを目的とした取組である。その取組で主眼とする点は、対面活動と遠隔活動の融合により、多言語・多文化環境へのアクセス、外国語運用の促進、異文化理解力の涵養である。この目的を達成するために、次の3つの研究課題(RQ)を設定した。

- RQ1: 外国人人材が極端に少ない地方において、都市部ほどの多言語・多文化環境に、日本人学生がアクセスできるような場を構築することはできるのか。
- RQ2: 地方における多言語・多文化環境の創出により、日本人学生の外国語運用は促進されるのか。
- RQ3: 情報技術を駆使した多言語・多文化環境の創出は、対面による交流の代替性を持つのか。

地方大学における異文化交流上の弱点は、地域内で容易に交流が図れない環境にも起因する。その克服のため、各校に属する外国人留学生を教育活用資源としてリソースを共有しながら、積極的に活用することで、隣接する地方大学間の連携による留学生広域インタラクション空間の創出を通じて、対面と同等の機会を遠隔技術で提供できるかどうかを試みる研究とした。

3. 研究の方法

本研究では、地方工学教育機関同士の緊密な連携による新しい形の「異文化交流」をテーマに、疑似的仮想空間上の留学生インタラクションの機会創出を行うことによって、小規模校に在籍する日本人学生であっても大都市マンモス校の学生と同等の交流機会を確保しつつ、北海道の地域事情に合致させながら、国際的視点を涵養できる教育・学習の場を提供するモデルを開発することである。初年度は研究グループ内において最新の遠隔授業形態に関する情報収集及び共有を行い、合宿を通じた広域地域内の異文化交流活動モデルの開発を行った。翌年度以降において、地方版の異文化交流モデルとして開発した合宿による対面異文化交流を継続させながら、遠隔による疑似的な異文化交流モデルの開発を行い、各年度で教育実践を通じて、検証した。

4. 研究成果

下記の3点に分け、記述する。

〔教育実践1〕(RQ1: 合宿を通じた広域地域内の異文化交流活動モデルの開発)

本研究における大学・高専は、互いに50km~200km離れる場所に位置しており、自校内での日常の異文化交流は皆無であった。そのため、各校の外国人人材である留学生の共有化を図り、合宿により、ある種強制的に異文化交流を図る機会を試行的に創出した。初年度は1泊2日、2年目以降は2泊3日と負担がかからないように配慮しつつ、対面による外国人との外国語運用による異文化交流機会を構築した。コロナ禍が始まる直前まで対面交流の定常的な確保ができ、一定の成果があったが、本執筆時点では対面交流は失われ、奇しくも全てがオンライン交流にシフトすることとなった。

留学生リソースの共有活用の点では、当初は各校所属の正規留学生のシェアリングとして構築したが、最終年度では当時(コロナ禍前)の増加傾向のあった短期研修生を対象とし、短期研修生の受入と同時に構築できる体制も各校で整備できた。

〔教育実践2〕(RQ2: 日本人学生の外国語運用は促進)

創出された異文化交流機会を機に、個人レベルでの持続的な交流がemailやSNS等の利用などから観察された。個人的な外国人友人が出来たことや、文字によるコミュニケーションの継続という点は見られたものの、当初期待された口頭による外国語運用の促進や、運用力の向上までは顕著な差が認められなかった。しかしながら、自律的な外国語学習へのモチベーション向上が見られ、学生からの外国語学習方法の相談が増えるなど、能力面ではなく意識レベルで効果が見られた。

このことは海外語学研修の効果と類似しており、本事業が海外留学の代替としての、地域内/国内留学といった活動の応用可能性を示すこととなった。

〔教育実践3〕(RQ3: 情報技術を駆使した多言語・多文化環境の創出と代替性)

オンライン交流に関して当初は、Moodleを利用したテキストベースの意見交換交流の基盤作り、およびSkypeを利用した映像・音声ベースの疑似体験交流の環境整備に取り組んだ。だが、特にSkypeの方については利用時間帯の統一を円滑に進めることが当時困難であったため、研究3年目までは実践が出来なかった。実践ができた3年目でも、対面交流後のSkypeを利用した映像・音声ベースの疑似体験交流は単発的で、継続運用できるだけのモチベーションを維持することは叶わなかった。

しかし、Moodleを利用したテキストベースの意見交換を対面交流前の事前コミュニケーション確保、また非同期による時間をかけた外国語運用機会に、一定の効果があり、その後の合宿形式の対面型異文化交流の流れという交流モデルを構築できた。また、研究最終年度において、コロナ禍となり、当時予定していた活動が全て中止となってしまったものの、当初運用のSkypeに代わってZoomの急速な普及により、Skype以外の高価なテレビ会議システムに頼る必要性も無くなり、個人のパソコン上で地方地域内のみならず、海外協定校との国際交流にも発展でき、課題研究の延長期間の中で、RQ3についてはコロナ禍の制約下でも、当初の想定以上の異文化交流モデルを構築することができた。

〔コロナ禍の延長期間における研究活動の副次的な成果〕

運営面において授業コンテンツ作成等の負担軽減になる他、留学生遭遇機会の創出効果を生み、地方連携による異文化交流プログラムの全容について、概ねまとめることができた。

また、期間延長した令和2年度以降はコロナ禍となり、それまでの事業で行っていた合宿交流を含む全ての対面活動が失われた。そのため、Zoom利用をはじめとするCOIL型のオンライン学習で維持するものの、コロナ禍2年目には一定の感染予防知見も得られたことにより、部分的に対面交流を復活させることができた。地方から海外への留学を目指すことにつながるような北海道の道南地域内における異文化交流活動としていたが、海外留学が出来ない事情により、その活動は地域内から国内留学へと発展し、日本縦断型の活動となって、日本広域の地方大学間の留学生リソースの活用に至るまでとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野 真嗣	4. 巻 70
2. 論文標題 モンゴル協定校との学術交流に関する活動報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 室蘭工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 クラウゼ小野 マルギット	4. 巻 70
2. 論文標題 ヨーロッパ研修旅行 ドイツで学ぶ英語 - 外に開かれた窓	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 室蘭工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono. M., Taquet. D., Baj. P., Kuriyama. M., Krause-Ono. M.	4. 巻 16
2. 論文標題 An Intercultural Exchange Activity on Disaster Prevention Education with Short-term Visiting Students from Italian Technical Institution	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of Joint Seminar on Environmental Science and Disaster Mitigation Research 2020	6. 最初と最後の頁 94-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Taquet. D., Ono. M., Krause-Ono. M., Kuriyama. M.	4. 巻 13
2. 論文標題 Developing Cross-Cultural Awareness in Provincial Hokkaido by Connecting Exchange Students and Kosen Japanese Students	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 13th International Symposium on Advances in Technology Education	6. 最初と最後の頁 519-522
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野真嗣, クラウゼ小野 マルギット, 栗山昌樹, タケ ディヴィッド	4. 巻 68
2. 論文標題 道内理工系三機関合同による異文化交流を通じた国際共修授業の実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 室蘭工業大学紀要	6. 最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono. M., Mikawa. Y., Watanabe. A., Koyabu. E.	4. 巻 1
2. 論文標題 An Attempt to Conduct Interdisciplinary Education on Railway Technology	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Transactions of ISATE : the 11th International Symposium on Advances in Technology Education, Ngee Ann Polytechnic, 19- 22 Sept 2017	6. 最初と最後の頁 359-362
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 小野 真嗣
2. 発表標題 コロナ禍の国際交流 一渡航から遠隔は新しい流れになるのかー
3. 学会等名 北海道言語研究会第20回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Krause-Ono, M.
2. 発表標題 Zoom +/- Bloom - Engaging Learners Online & Offline
3. 学会等名 46th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上 愛, 小野 真嗣
2. 発表標題 自宅「留学」の体験報告 - COIL型教育の試行的取組 -
3. 学会等名 PCカンファレンス北海道2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野 真嗣
2. 発表標題 海外渡航に寄らない国際交流活動の実践報告 - 実質化した活動があつてのオンライン交流 -
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会第6回北海道支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Taquet, D.
2. 発表標題 International Programs at NIT Hakodate College: challenges, rewards, and prospects
3. 学会等名 6th Annual Meeting, Local Branch of Hokkaido Region, The Japan Association for Global Competency Education (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野 真嗣
2. 発表標題 ウィズコロナの時代ではどんな国際交流活動ができるのか - 地域内・学校内におけるグローバル人材の育成と共有 -
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会第6回北海道支部大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田杏佳, 小野真嗣, クラウゼ小野マルギット, ゲレル・ウルジ ナラン, フレルトゴー・ムンフエルデネ
2. 発表標題 国際共修授業における異文化交流に対する受講学生の意識調査
3. 学会等名 第25回高専シンポジウムin久留米
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森下傑彦, 栗山昌樹, タケ・ディヴィッド, 小野真嗣, クラウゼ小野マルギット
2. 発表標題 高専短期留学生との共修合宿研修 - 室苫函留学生人材共有化プログラム報告 -
3. 学会等名 第25回高専シンポジウムin久留米
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗山昌樹, 小野真嗣
2. 発表標題 外国人留学生に対する日本語授業の遠隔講義実践 - 水道工学を題材とした専門講義への橋渡し授業 -
3. 学会等名 第25回高専シンポジウムin久留米
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野真嗣, クラウゼ小野マルギット, タケ・ディヴィッド, 栗山昌樹
2. 発表標題 地方大学間の留学生シェアリングによる異文化交流機会の創出 - 外国語運用を促す対面授業と配信授業 -
3. 学会等名 函館英語英文学会 令和元年度研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野真嗣
2. 発表標題 外国人留学生と日本人学生の異文化交流実践 - 地方における遭遇機会創出に向けた人的資源シェアリング -
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会(JAGCE)北海道支部第5回研究大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野真嗣
2. 発表標題 地方大学における留学生の人的リソース共有化による異文化交流実践
3. 学会等名 実用英語教育学会(SPELT)第8回研究大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野真嗣
2. 発表標題 海外研修科目におけるMoodle利用の効果 広報・事前指導から事後単位認定まで
3. 学会等名 コンピュータ利用教育学会 2018 PC Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ono. M., Krause-Ono. M., Kuriyama. M., Taquet. D.
2. 発表標題 Collaborative Language Learning through Cross-Cultural Understanding among Domestic and International Students in Provincial Technical Colleges
3. 学会等名 The 17th Hawaii International Conference on Education(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒川唯人, 小野真嗣, クラウゼ小野 マルギット, 栗山昌樹, タケ ディヴィッド
2. 発表標題 日本人学生と外国人留学生との自然災害をテーマとした共修体験
3. 学会等名 第24回全国高専シンポジウムin小山
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ponmani. H., Ono.M., Krause=Ono. M., Kuriyama. M., Taquet. D.
2. 発表標題 An Instruction to Japanese and International Students on Global Environment in Cross-Cultural Camp
3. 学会等名 第24回全国高専シンポジウムin小山
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野真嗣, 小川祐紀雄, 大橋智志
2. 発表標題 ネットニュース上の日本語使用に関する一考察 口語的環境におけるカタカナ使用
3. 学会等名 コンピュータ利用教育学会(CIEC)2017PCカンファレンス
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小野真嗣, 大橋裕子
2. 発表標題 二国間双方向の海外研修を通じた異文化交流プログラムの実践
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会(JAGCE)第5回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小野真嗣
2. 発表標題 外国語学習への動機付けとしての異文化間コミュニケーション活動をより効果的にするためのレディネス形成と事後評価
3. 学会等名 北海道言語研究会/室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット研究成果報告会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

No Title https://iti.agnelli.it/torino-hakodate-tokyo-torino/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	taquet david (TAQUET David) (50710901)	函館工業高等専門学校・一般系・准教授 (50101)	
研究分担者	栗山 昌樹 (KURIYAMA Masaki) (60509917)	苫小牧工業高等専門学校・創造工学科・特任教授 (50102)	
研究分担者	クラウゼ小野 マルギット (KRAUSE-ONO Margit) (70400059)	室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授 (10103)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大橋 裕子 (OHASHI Hiroko)		
研究協力者	ゲレル ウルジーナラン (Gerel Ulziinaran)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関